

地域学習 一下総国府を学ぼうー

藻利國恵 古川日出夫

身近な地域の歴史を学習テーマとし、博物館の支援やフィールドワーク等の体験学習を通して、生徒が「主体的」「積極的」に学び、「課題解決」に向けて取り組んだ、3か年の学習活動を報告するものである。

学習成果は生徒それぞれがPower Pointを用いてプレゼンテーション資料を制作し、蓄積していった。一つの課題が終わるごとに保護者・大学職員・大学生等に向けた学習発表会の形でプレゼンテーションを行い、コミュニケーションスキルの向上を図った。また、下級生の社会科の歴史を学ぶ教材としてデジタルスクラップブックにし、活用できるようにした。

【キーワード】 博学連携による地域学習 横断的・総合的な学習 循環型学習形態 ICT教材
コミュニケーション能力の向上

1. はじめに

平成15年度から総合的な学習の時間を活用して、博学連携による（和洋女子大学文化資料館と本校中学部との学習）、「下総国府を学ぼう」に取り組んできた。その学習成果はICT教材にまとめ、社会科歴史「日本の古代」を学ぶ授業でも活用している。

本稿は、平成21年度入学生15名が、卒業生の学習成果に影響を受け、地域学習「下総国府を学ぼう」に意欲的に取り組み、3年間継続して学習活動をおこなった実践報告である。

フィールド調査、調べ学習、大学の先生との連携による学習、学習成果のまとめ、プレゼンテーション等、体験を重視した一連の学習活動では、生徒の関心や疑問を大切に生かし、自ら探究していく学習を目指した。その結果、生徒自らが主体的に取り組み、学習内容を深化・拡充させていった。

プレゼンテーションの資料作成や実施の際には、生徒同士が協同して資料作りをした。ICTを活用し、保護者、和洋女子大学文化資料館の職員、筑波大学の学生に向けて行うプレゼンテーションの体験は、コミュニケーションスキルの場にもなった。また、「質問に答えてもらう学習」や「学んだ知識を絵画と文章で表現する学習」では、和洋女子大学文化資料館の駒見先生に来校していただき、専門的な立場から支援を得て、知識を深めることができた。

筑波大学の学生には、Skypeを媒体として生徒の

プレゼンテーションを視聴してもらい、助言と評価を得ることができた（写真1）。教育実習等でお世話になった大学生との再会は遠隔地間交流を体験したともいえよう。

3か年の学習成果であるICT教材は、平成24年度に入学した1年生14名を対象に試みた結果、「生徒たちは学習への興味・関心を高め、理解を促すことができる」有用な教材の事例として、平成24年度聴覚障害教育担当教員講習会中学部資料『学習指導の工夫とICT活用一統・中学部における実践事例』で報告している。（M）



写真1 筑波大学生との遠隔授業（2012年3月7日）

2 国府・国分寺学習のねらい

若い頃、長距離サイクリングに凝って自転車で関東・東北・北海道・北陸・東海・山陽・九州と旅をしていた際に、全国いたるところで「国分」の地名や「国分寺」の標識を目にした。1日に130～170kmの移動が必要だったため、見かけただけで立ち寄ることはなかなかできなかったが、記憶の片隅にはそのことがしっかりと刻まれている。

その、全国に点在する国分寺や国分寺史跡の中で、下総国分寺がどんな位置付けにあり、どんな歴史的価値を持つのか。自分自身にとって興味深い内容であると同時に、生徒にとっても中学時代のみならず長期的な学習課題として取り組んでいけるテーマではないかと考えたわけである。

まず手始めに、『関東地方の国分寺の比較』というタイトルで、常陸・下野・上野・下総・上総・安房・武蔵・相模の八つの国分寺を比べながら自分の調べたいテーマを掲げる内容の提示資料を試作し(図1)、プレゼンテーションのデモンストレーションという形で生徒に視聴させた。(F)

関東地方の国分寺の比較					
名称	現在の所在地	本尊	伽藍配置	塔	備考
常陸国分寺	茨城県石岡市	薬師如来	国分寺様式	七重塔	
下野国分寺	栃木県下野市	大日如来	国分寺様式	七重塔	
上野国分寺	群馬県高崎市	—	国分寺様式	七重塔	廃寺
下総国分寺	千葉県市川市	薬師如来	法隆寺様式	七重塔	
上総国分寺	千葉県市原市	薬師如来	大官大寺様式	七重塔	
安房国分寺	千葉県館山市	薬師如来	不明	七重塔	
武蔵国分寺	東京都国分寺市	薬師如来	国分寺様式?	七重塔	移築
相模国分寺	神奈川県海老名市	薬師如来	法隆寺様式	七重塔	

興味のあることがらをインターネットで調べ、
上のような表にしてみました。

図1『関東地方の国分寺の比較』の一部

3 平成21年度からの取り組み

本学習の対象生徒15名のうち、13名は本校小学部から、2名が他の聾学校からの入学者であり、男女数は男子10名、女子5名と男子の多い学年である。入学時から明るく活発で、学習面でも、個人差はあるが知識欲は旺盛で、意欲的に取り組む。一方、自己中心的で、他者を思いやる気持ちにやや欠ける面

があったが、上級生になるに従い、グループ編成や話し合い活動でも協力し合い、友だちと意見が違っても調整し合う力を付けていった。

1年生の時、歴史の授業で卒業生の自作教材DVD「下総国府を学ぼう」を活用した。身を乗り出して視た後、「僕たちも和洋女子大学文化資料館で勉強したい」、「私たちもいろいろなところに見学に行きたい」等、大変意欲的であった。また、学年担当をする教員間でも、地域学習への共通理解が図られ、教師自身が興味を持つことができるなど指導体制が整った。隣接する和洋女子大学文化資料館の支援を得ることができたことも、この学習が成立した要因であると考えている。

学校周辺に位置する「下総国府・国分寺」から少し観点を広げて、関東に残る他の国分寺との比較、また修学旅行で訪れる「東大寺」(全国の国分寺の中心)と関連を調べるなど、探究の対象は、学年が上がるにつれて広がり、ダイナミックに発展していった。(M)

4 プレゼンテーション準備の配慮事項

生徒の学習活動と併行して、武蔵国分寺や安房国分寺・上総国分寺を実地踏査しながら、『武蔵国分寺』『千葉県の国分寺』などのプレゼンテーション資料を作り、デモンストレーション発表を行った。現地で撮影した写真や、発表のために自作した画像(伽藍配置図など)は、全体の共有財産として、自由に使ってもらった。

自分で直接「国府・国分寺を学ぶ」活動に関わってみると、インターネットにはさまざまな情報が氾濫し、複数のWeb.ページで記載にずれがあることも少なくないということを痛感した。中には公式のページであるのに首をかしげたくなる記述も見られた。また、Web.ページを制作してから時間が経っているという事情からか、写真や記述が現在の状況と異なっているものもあった。まして刊行して10年以上も経っている「本」となればなおさらである。

「調べ学習」というのは、この辺りの「矛盾点」に自ら気づき、より確からしいと思われる内容を、複数の情報から選別していく姿勢や感覚を養うもの

ではないだろうか。「書いてあったからただ写す」のではなく、それまでの自分の知識や、理解していたことと違う内容に出会ったら、鵜呑みにするのではなく立ち止まって考える。そんな学習を2年、3年と続けていければ、生徒の「学ぶ力」は大きく伸びるだろうと思われた。

プレゼンテーション資料の作成にはPower Pointを用いた。1年生にはさすがに手強い課題でもあったので、『関東地方の国分寺の比較』のデータを各生徒のフォルダーにコピーし、参考にするなり、上書き・加工するなりしてよいものとした。

最初は、一人あたりの発表時間の目安として5～7分と設定し、それに見合うページ数をつくる、というのを課題とした。

画面の色づかいや文字スタイル、アニメーションなどの動きについても、「見る側の立場」を考え、過度にならないように指導はしたが、この点については、作ることが楽しくなりすぎたのか、初めは必ずしも守られず個人差が大きかった。しかし、発表を重ねるにつれ「見やすい提示画面」とはどんなものか、理解していったようだ。

他のWeb.ページを参考にする場合、文章の場合は「引用」と明示すること、写真については利用していいものか確認すること、いずれの場合も出典を示すこと、などを指導した。この点についても、一人一人が理解し身に付くまでには、かなり長い時間を要したと思う。(F)

5 3年間の学習活動の実際

3年間の学習の過程はおおよそ次のようなものであった。

(1) 1学年

①下総国分寺・国分尼寺の見学

(2009年12月15日)

下総総社跡(国府台スポーツセンター内の史跡)、下総国分寺、国分尼寺跡公園を歩いて見学した。

現地では教師の説明を聞いた後、グループ毎に取材活動をした。グループに1台ずつデジタルカメラを持たせ、ワークシートを活用しながら見学するようにした。合わせてこれから継続して学習していく

予定の文化遺産の価値を考えさせ、文化財見学のマナーについても指導した(写真2)。



写真2 出発前のガイダンス

②和洋女子大学文化資料館の見学

(2009年12月22日)

土器や瓦の実物に直接触れたり、専門家による説明を通して、知識を深めさせることをねらいとした。また、本校卒業生の製作したジオラマ作品を観察し、その工夫点を考えるとともに当時の市川の様子を想像させるようにした。駒見先生から下総国府の発掘調査についての講義をしていただいた(写真3)。



写真3 和洋女子大学文化資料館学の様子

③駒見和夫先生の訪問授業(2010年1月13日)

和洋女子大学文化資料館の駒見和夫先生を中学部にお招きし、事前に提出しておいた各自の質問事項に答えていただく形で、それぞれの質問内容について、全員が共通の理解を持てるようにした。これらの体験によって、次年度に各自の取り組むテーマが少しずつ明確にイメージできるようになったようだ。

④「国府を学ぶ」学習発表会（2010年3月17日）

①～③で学んだことをもとに、各自が発表のテーマを決め、保護者対象の発表会に向けてプレゼンテーション資料を作成した（図2）。発表時間は一人3～5分間を目安とし、Power Pointを用いて制作したものをお互いに発表し合った。

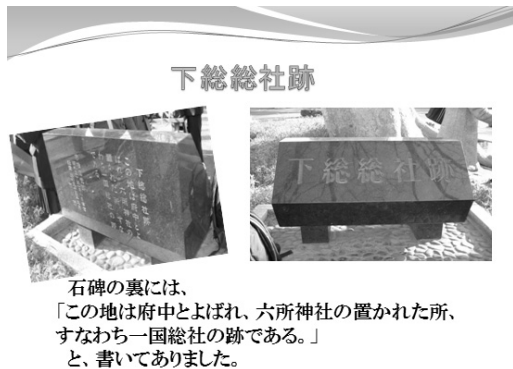


図2 生徒作品『タケコプターで下総国府へ』の一部

(2) 2 学年

①武蔵国分寺・国分尼寺の見学

(2010年11月19日)

東京都国分寺市の武蔵国分寺跡資料館と武蔵国分寺跡・武蔵国分尼寺跡周辺を歩き、取材した。下総国分寺と比較しながら、自分の取り組むテーマを明確にすると共に、修学旅行につなぐ学習を目指した。武蔵国分寺跡資料館には市民の手による大規模な国府再現模型が展示され、生徒達も具体的なイメージを持つことができたようだった（写真4）。



写真4 武蔵国分寺跡資料館見学の様子

②武蔵国分寺の学習発表会

(2010年12月17日)

保護者と和洋女子大学文化資料館の職員を招いての学習発表会を行った。「下総国分寺」と「武蔵国分寺」を比較し、違いや共通点等、興味や疑問を持ったことからテーマを決め、一人の発表時間5分間を目安として・発表会に向けてのプレゼンテーション資料を作成させた（図3）。最後に、駒見先生に専門家の立場からの感想とアドバイスをいただいた。



図3 生徒作品『下総・武蔵の比較』の一部

(3) 3 学年

①修学旅行（2010年5月31日～6月2日）

奈良（法隆寺・東大寺）と京都（琵琶湖疏水とインクライン・金閣寺・銀閣寺・清水寺・二条城）を見学し、京都ではおたべ作りの体験をした。

旅行に先だち、これまで学習してきた内容を極力盛り込んで葉を作成した。現地ではワークシートを活用し、本やインターネットで調べてきたことと、「世界遺産」である実際の建造物や文化財と対照しながら見学できるようにした。

②修学旅行報告会（2011年7月12日）

3回目となる学習発表会に向け、「金閣寺」「銀閣寺」「二条城」「法隆寺」「東大寺」「南禅寺～インクライン」「おたべ」の7グループに分かれてプレゼンテーション資料作りを行った。これまで一人ずつ行っていた作業をグループで進めることにより、負担は少なくなる反面、どんなものをどのように作っていくかというコミュニケーションが不可欠となった。しかし、相手の意見を聞き、技術やアイディア

を尊重しながら妥協点を見つけていく共同作業は、その後、文化祭の劇『銀河鉄道の夜』の創作や卒業アルバム制作の際に大いに役立ったようだった。

また、発表の折にも一人一人の役割をうまく調整しながらスムーズに進行するように、よく工夫されていた。(写真5)



写真5 修学旅行報告会の様子

③筑波大学学生との連携・遠隔授業 (2012年3月7日)

3年間の総合的な学習のまとめとして、「下総国府・国分寺」「武蔵国分寺」「奈良」「京都」の4班を編成し、発表に向けてのプレゼンテーション資料を作成させた。「今までに作った資料を活用する意味で、グループ内の作品を確認し、使えるページを合成する形でまとめていってもよい」と指示したが、発表時間の制約もあり、個々の作り方にもバラつきがあったようで、結局は大半のグループが新たに作っていく方法をとったようだった。

発表する様子をテレビカメラで撮影し、インターネット回線(Skype)で筑波大学の教室に送り、待機した5人の大学生から、プレゼンの内容、まとめ方、コミュニケーションの工夫等について評価、アドバイスを受けた。

④「下総国府」学習のまとめ

プレゼンテーション準備と併行して、当時の人々の暮らしぶりを絵画と解説文で表現する活動を行った。生徒の興味や関心に応じたテーマや内容を選ばせ、ファイルに蓄えた資料や市川に関する歴史書を活用しながら制作させた。最後の段階では駒見先生

のアドバイスを受けながら(写真6)、後に資料としても活用できるほどのレベルで完成させることができた。(M・F)



写真6 駒見先生から絵のアドバイスを受ける様子

6 修学旅行との関連

中学部の修学旅行は、例年「京都方面」を基本としてプランニングされているが、たまたま前学年が「遷都1300年祭」を動機として奈良を訪れていたこともあって、奈良をプランに組み入れることが可能になった。「国府・国分寺を学習してきたからにはどうしても『総国分寺』である東大寺を見せたい」「世界遺産である法隆寺も是非訪れたい」、さらには総合的な学習のもう一つの柱であった「水の学習」の集大成としての琵琶湖疎水とインクラインも外せない、大政奉還の舞台となった二条城二の丸御殿も……と、かなり欲張りなプランニングとなったが、公共交通機関を効率よく乗り継ぐことで、なんとか二日目に法隆寺と東大寺の見学を可能にした。特に東大寺では大仏・大仏殿の大きさに圧倒され、端から端まで歩いて境内の広さに目を丸くした。この広大な伽藍の中に二つの七重塔がそびえ立つ壮大な光景を生徒一人一人が思い描くことができたなら、まさに「修学」旅行であったと言えるだろう。(F)

7 活動の様子と評価

校外学習として、「下総国府・国分寺跡」へフィールド調査に出かけたときは、真面目で意欲的にそれぞれの課題に取り組んでいった。

部活動で利用する市川スポーツセンターは、「奈良・平安時代には役所が置かれ、政治の中心地で

あった」という知識は持っているが、現場に身を置くと、想像が膨らみ、歴史を身近に感じることができる（写真7）。



写真7 下総総社跡見学の様子

和洋女子大学文化資料館での体験学習は興味関心を高めていった。インターネットや本で調べ学習に取り組むなかで、新たな疑問が湧いてきた。駒見先生に来校していただき、「質問に答えてもらう」学習にも取り組んだ。「知らなかったことをたくさん学べた」と多くの生徒は答えた。専門家から学ぶ楽しさを体験できた学習である。例えば写真8は、生徒からの「下総はどれくらい豊かだったのですか？」との質問に、駒見先生が「大国に位置付けられました。豊かであったかどうかわかりませんが、朝廷の期待は大きかったことがわかります」と答えられている様子である。

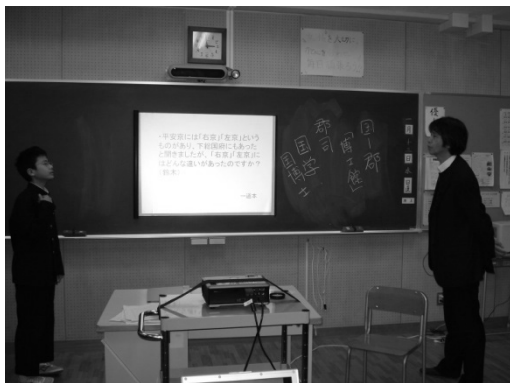


写真8 生徒の質問に答える駒見先生

いざプレゼンテーション資料を制作する段になると、取り組み方に個人差がみられた。意欲的に取り組む生徒が多い中で、なかなかテーマが決まらず、

方向性を見つけられないまま、指示を待つ生徒も一部に見られた。友だちと教師のアドバイスや手助けを得て仕上げていった。

写真9は、2年生の時のプレゼンテーションの様子を表している。保護者に向けて設定し、駒見先生にも見ていただき助言をしていただいた。生徒たちはやや緊張した面持ちで、一生懸命伝えようとする姿が印象に残った。書道が得意な生徒は「奈良時代の硯」について「種類、どこで使われたか、どんな時に使われたか、どういう経路で伝わってきたか」を調べ、自作の挿絵やクイズ形式を取り入れて工夫しながらまとめていた。駒見先生は「私は知らなかったことなので、大変楽しく学ぶことができました」と講評の中でこのような言葉を述べられた。

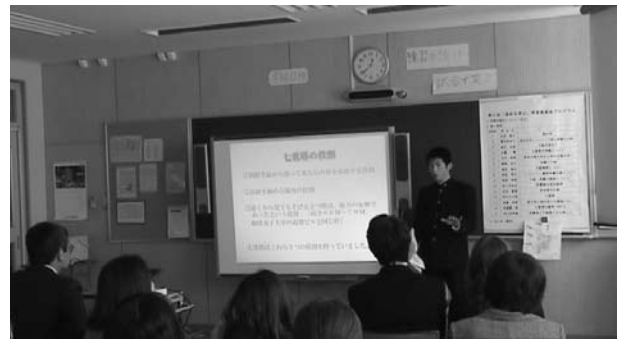


写真9 保護者・和洋女子大学文化資料館職員を招いての学習発表会（2010年12月17日）

卒業間際の3月に行ったのは、3年間継続して取り組んできた「下総国府・国分寺の学習とプレゼンテーション」の成果を遠隔地の大学生に見てもらい、アドバイスをもらう学習である。プレゼンテーションの場を本校中学部に設置し、Skypeを通して、筑波大学の講義室で待機する3名の大学生と交信した。手話を交え、プレゼンテーションを視聴してもらい、工夫や改善点をアドバイスしてもらうことを目的とした。

最後に、3年間の総まとめとして「下総国府・国分寺」の学びを絵画と文章で表現する学習も行った。学んだ知識をもとに、生徒一人一人が興味・関心に応じたテーマや内容を決め、下絵を描き解説文を作る。各自の『地域学習用ファイル』資料や市川に関する歴史書を活用しながら制作していった。個別に駒見先生からアドバイスをもらいながら、仕上げて

いった。完成した生徒の作品は、デジタルスクラップブックにまとめ（図4）、社会科の学習で活用できるようにした。（M）

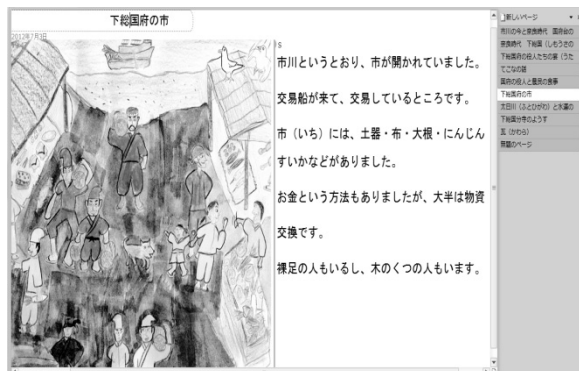


図4 One Noteで作成したデジタルスクラップブック

8 アンケート結果から

「筑波大学学生との連携・遠隔授業」を行った後、参加してくれた学生と中学部生徒の双方からアンケートをとった。

質問項目は、

質問紙A（中学部生徒向け）

- ① 発表に取り組む態度はどうでしたか。あてはまる所に○をつけてください。（5段階評価・自由記述。以下同じ）
- ② 発表を聞く態度はどうでしたか。
- ③ 伝えたいことが大学生に伝わったと思いますか。
- ④ 大学生参加による遠隔授業はどうでしたか。

質問紙B（大学生向け）

- ① 中学生の発表に取り組む態度はどうでしたか。
- ② 中学生の発表の内容は伝わりましたか。
- ③ 中学生の発表の内容は理解できましたか。
- ④ 遠隔授業による中学生の授業に参加してみてどうでしたか。

という形式であった。

集計結果は、（回答数中学生15／大学生5）

中学生①（大学生①）

- ・発表に取り組む態度はどうでしたか。

とても積極的だった	6 (5)
まあまあ積極的であった	7 (0)
どちらとも言えない	2 (0)

あまり積極的ではなかった 0 (0)

積極的ではなかった 0 (0)

中学生②

- ・発表を聞く態度はどうでしたか。

とても積極的だった 6

まあまあ積極的であった 6

どちらとも言えない 2

あまり積極的ではなかった 1

積極的ではなかった 0

中学生③（大学生②）

- ・伝えたいことが大学生に伝わったと思いますか。

（中学生の発表は伝わりましたか。）

とてもよく伝わった 0 (1)

まあまあ伝わった 14 (4)

どちらとも言えない 1 (0)

あまり伝わらなかった 0 (0)

伝わらなかった 0 (0)

大学生③

- ・中学生の発表の内容は理解できましたか。

とてもよく理解できた (2)

まあまあ理解できた (3)

どちらとも言えない (0)

あまり理解できなかった (0)

理解できなかった (0)

中学生④（大学生④）

- ・大学生参加による遠隔授業はどうでしたか。

（遠隔授業による中学生の授業に参加してみてどうでしたか。）

とても有意義だった 9 (3)

まあまあ伝わった 6 (2)

どちらとも言えない 0 (0)

あまり有意義ではなかった 0 (0)

有意義ではなかった 0 (0)

以上のように、発表する側（中学生）と視聴する側の評価が、各項目においてかなり相関が高いことがわかる。不十分であったことに関しても、自由記述の表現や他の様式（各グループに向けて）のアンケートの中にも大学生は具体的なアドバイスを多く残してくれていて、また中学生も一つ一つのアドバイスの内容をよく理解していたので、今後、高等部

や大学に進学してプレゼンテーションを行う際に、この体験は大きな力となることであろう。(F)

9 まとめ

本校中学部の場合、地域学習に取り組む手段としては、卒業生の自作した学習教材を足がかりに、関心を高め、フィールド調査や博物館を訪問したり出前授業を受けたりすることで課題追求学習へとつなげていくようにしている。さらに学習成果のまとめはICTを活用した自作教材を作成し、プレゼンテーションの場を設定する。プレゼンテーション能力やコミュニケーション能力を高めるよい機会と捉えているからである。歴史学習に苦手意識を持つ生徒も一連の活動を通して、調べ学習に関心を高め、意欲的に取り組んでいく様子がみられる。

さらに、学習成果は下級生の社会科の学習教材としての活用が図られる。顔見知りの上級生の作品が提示されると、生徒たちの興味・関心は高まる。問題意識を高め、新たな疑問や質問が生まれる。そこで、総合的な学習の時間を利用し、調査に出かけたり、調べたり、博物館の専門家から学び、発表する学習へと深化・発展する。このように、学習の内容は年々蓄積され、ICT教材の内容の幅と質を高めている。本校中学部での地域学習はルーティン化し、ICT教材の活用の仕方は、生徒の実態に応じて広がっていく。活動に関連性があるので、教師の負担は軽くなり、教材の充実を図られる利点を感じている。

平成21年度入学生15名も、3年間継続して取り組んできた「下総国府・国分寺の学習」では、「教室で学んだことを現地で確認したり、博物館で実物に直に触れる体験学習」から「疑問や課題を見つけながら本やインターネットを使って調べたり、専門家に『質問に答えてもらう学習』」を通して、「テーマを決めて一つの発表資料の形にまとめ」、「学習発表会を通じて、友人の発表を聞き比べることで次の学習課題を思い描いていく」という循環型の学習形態を効率よく実践することができた。また、「東大寺を中心とした全国の国分寺の中の一つ」という観点から下総国府・国分寺を考える、ダイナミックな歴

史観が生徒の中に根付くことができたのではないかなと思う。生徒の興味・関心に沿いながら、生徒の知的好奇心を満たす博学連携による遺跡や文化財の観察・専門家の知識面での支援が、意欲的に取り組むことができる学習教材となり、生徒の学習成果につながったといえる。

本実践を進めるにあたり、和洋女子大学文化資料館の駒見和夫先生には多大なご協力を賜ったことに、感謝申し上げる次第である。(M)

参考文献

教科指導と読み書き・ICT活用

—中学部における実践事例—

編著者 筑波大学附属聴覚特別支援学校

図説市川の歴史 平成21年3月 市川市教育委員会

武蔵国分寺のはなし

平成22年3月 国分寺市教育委員会